

第3号の発刊に寄せて

アサーティブ研究センター長 福島 一政

アサーティブ研究センター紀要第3号をお届けします。

アサーティブプログラム・アサーティブ入試の事業は、2019年度末をもって、6年間の「大学教育再生加速プログラム」の補助対象期間を終えます。これからは、自前の資金でこの事業を推進していくこととなります。当研究センターは、この事業に直接責任を負っているわけではありませんが、本事業の結果に対する分析を通して課題を示し、事業の発展に大きく寄与してきたと自負しています。

「大学教育再生加速プログラム」の中間評価では、「本事業の目的を十分に達成することが期待できる」、「全国的な先進性を一層発揮できるのではないか」としてS評価をいただきました。

「大学教育再生加速プログラム」の令和元年度フォローアップ報告書では、すべての項目について順調に進捗しているとされ、取組上の課題については一つも指摘されていません。これに基づく、審査委員等による現地視察が、2020年2月10日に行われましたが、極めて前向きな講評をいただきました。3月末までには正式な形で公表されるとのことですので、ここで記すことは控えます。

さて、本号では、客員研究員の木村治生氏から、「特色あるAO入試の成果と課題に関する検討」として、本学アサーティブプログラム・アサーティブ入試を事例に、当研究センターでのアサーティブ入試入学者の4年間追跡データを基に検証したうえで、学生の成長を軸に入試と教育の成果を可視化することの重要性を指摘し、今後の課題も明らかにする意欲的な論文を寄稿していただきました。

また、同じく客員研究員の倉部史記氏からは、「高校が生徒に活用を促している進路学習のためのコンテンツに関する考察－高大接続改革「三つの方針」と「三つの理解」をモデルにして－」を寄稿していただきました。ご自身の体験も踏まえた実証的な分析をされています。現状の高大接続に関する議論が入学者選抜に関わる一部の施策の詳細に偏重しており、そこを乗り越えたバランスの良い議論が重要であると指摘されています。

当センター前センター長の池田輝政氏からは、「戦略立案から捉える高大接続の挑戦：アサーティブ接続取組みの事例」として、アーティキュレーションとトランジションの視点から表題の分析をして、アサーティブの取組が、大学経営戦略として数少ない成功事例とし、今後の展開を示唆する論文を寄稿していただきました。

私の論考は、「高校生の意識実態と中高教員の労働実態から高大接続・高大連携の在り方を考える」とし、現状の高大接続や入試改革の議論は、高大接続システム改革会議の最終報告の内容とかけ離れたものになっているのではないかとという視点から、高校生の意識や高校教員の労働実態を踏まえた問題提起をさせていただきました。

最後に、世界と日本の未来を担う青年たちの成長をどのように支えていくのか、という視点から大学入試や高大接続・高大連携を考えると、大学人は何をなすべきか。本紀要が何らかの示唆になればと心から願っています。